自閉症児との関わりにおいて生じる枠の意味

――プレイセラピーを通した関わりで生じる枠と身体の関連性――

浦崎　　武

Ⅰ．目　的

自閉症児の発達において身体の問題は通過すべき大切な課題である。心理療法においては身体について焦点を当てること、あるいは身体像の変容に目をむけることは重要な課題とされてきた（伊藤、1984；千原、2002）。その身体の変容に自閉症児とのプレイを通して触れていく時、「枠」のテーマがその遊びの中に生じてくることを日々の臨床経験を通して感じている。今回は筆者との心理療法過程で生じてきた枠と身体の関連性を事例を通して検討し、その枠の意味について考えてみたい。

中井（1984）は「枠付け法」という、セラピストが枠を描いてその枠の中にクライアントに絵を描いてもらうという表現療法の技法を創案した。その「枠付け法」からは、描画を描く時に枠を描いておくことにより、クライエントの表現することに伴う内面の揺らぎに着目し、それを治療的に有効に活かすという意味合いが感じとられる。その技法は、河合隼雄の講演のなかでの「分裂病者はしばしば柵を周囲にめぐらせてからその中に箱庭を置く」と話されたことからのひらめきから考え出されたものだと言う。自閉症児も分裂病者と同様に、自己存在基盤が弱いことを考えると治療的に有効に利用することが可能だと考えられる。また、自閉症児は発達障害でありその枠との関係を発達論的に考えていくことにおいても彼らへの支援の新たな可能性を見いだすことができる。

今回は、筆者とのやりとりのなかで枠を描く過程を通して身体像を描いた２つの事例について報告し、検討を進めていきたい。まず、１つ目の事例は、枠内を塗り続ける過程で自己像を描いたＫ君－６歳１ヶ月～11歳10ヶ月、男性、広汎性発達障害（以後、事例１）、２つ目の事例は、人との関係を基盤に鏡に興味を示し自己像を描いたＡ君－２歳８ヶ月～５歳８ヶ月、男性、広汎性発達障害（以後、事例２）である。枠は、治療的な事例の流れの中で生じてくるものであると捉え、まず、この２つの事例の経過を記述する。そして、２つの事例における身体に焦点を当てて、枠の意味について考える。

Ⅱ．事例の概要

１．事例１―枠内を塗り続ける過程で自己像を描いたＫ君―

〈症例〉　Ｋ君（＃１～157　６歳１ヶ月～11歳10ヶ月）男子

〈主訴〉　他者とのコミュニケーションがとれない（母親談）

〈家族構成〉　父親39歳（会社員）、母親36歳（専業主婦）、長男10歳（小５）、次男８歳（小３）、本児６歳（小１、特殊学級）。

〈生育歴〉

妊娠中異常なし。在胎10ヶ月。普通分

娩。出産時体重3640ｇ、首の座り４ヶ月、８ヶ月に人見知りがあり、10ヶ月「マンマ」等の言葉を喋り始めた。目も合った。１歳半の検診の時、言葉は「マンマ、ネンネ、アイタ、ポイ、ハッパ、オチャ」等10語程度あったが２歳頃までになくなった。指さしをしなかった。２歳半にＮ市の児童福祉センターやＩクリニックで自閉症と診断された。２歳から３歳にかけて目が合わなくなった。特に音に敏感で、手で耳を塞いだりするようになった。物を並べたり、道順にこだわった。好きな遊びはパズルやビデオ。３歳の時は時計や地下鉄の音をひどく怖がり大変だった。

２．事例２―人との関係を基盤に鏡に興味を示し自己像を描いたＡ君―

〈症例〉　Ａ君（＃１～99　２歳８ヶ月～５歳８ヶ月）男子

〈主訴〉　言葉の遅れ、人と上手く関われない、母親を求めてこないのでどのように関わっていいのか分からない。（母親談）

〈家族構成〉　父（会社員）、母（専業主婦）、本児２歳８ヶ月、長女１歳５ヶ月

〈生育歴〉

2800ｇで産まれ、首の座りも良かった。落ち着かず、抱きづらかった。お猿さんみたいな感じがした。抱いている人の顔を見なかった。母親が顔をじっと見ると目を閉じて逸らすことが多かった。１歳半からは目が合うようになった。笑いがあり、よく寝たので育てやすかった。アルファベットが好き。ＡＢＣとか言っている。「まる」「さんかく」「しかく」が言える。数字も読める。最初は母親に「パパ」と言った。「ママ」より早く覚えた。２歳５ヶ月で模倣が増えた。テレビの踊りを真似て踊る。ＣＭが好きで実際にご飯を食べるときに「ごはんが、ごはんがすすむくん」と歌っている。現在は週２日、Ｍ市の養護訓練センターへ通っている。

Ⅲ．経　過

１．事例１の経過

第１期　＃１（６歳１ヶ月）～＃９（６歳３ヶ月）―自販機に固執する自閉的な枠からトランポリンの枠へ―

＃１、プレイルームに入ると視線はＴｈに向けられることはなく、さまよい宙に浮いているようであった。自販機の玩具に興味を示し、コインを投入口に入れて、ボタンを押し缶ジュースを取り出すことを何度も繰り返した。Ｔｈとの関わりをサッと身をかわして避け、自販機の操作を繰り返した。＃２においても自販機の操作を繰り返した。自販機での遊びは、ものを取り入れて排出させる身体の役割をイメージさせる遊びのように感じた。ボタンを押す自販機の操作がうまくいかなくなったときＴｈの手を自分の手の延長のように用い、Ｔｈは道具的な「物」として扱われているように感じられた。＃４ではトランポリンでひとりで跳んでいたＫ君は、Ｔｈがマットに乗り、マットを揺らすと「きゃっ、きゃっ」と笑った。しかし、Ｔｈと向かい合うことを避け、背を向けて跳ぶことが多かった。トランポリンを跳んでいる姿からは本児のバランスの悪さ、動きのぎこちなさが感じられた。手を繋いで跳んでみたが、彼の身体は硬く、繋いだ手からは握り返してくる力を感じることができなかった。しかし、しばらく一緒に跳んでいると手を繋ぐことに抵抗を示さなくなった。ホワイトボードに勢いよく走っていき、そこに長方形を描きその中に十字を描いた。＃５では、待合室でＴｈが来るのを待てるようになった。自販機を用いた遊びから、マジックを使って長方形の枠を描きその中を塗る遊びが大半を占めるようになった。＃６、Ｔｈがトランポリンをひとりで跳んでいるＫ君を見守っていると、ちらっちらっとＴｈの方に視線を向けてきたのでＴｈも参加することにした。すると、Ｋ君は喜んでより一層勢いよく飛び跳ねた。Ｔｈが跳ぶことによって生じる振動で立っていることがで

きなくなると座り込んだ。しばらく、その状態でトランポリンの揺れを楽しんでいた。＃８ではトランポリンで跳んでいるＫ君にマットの下から手を差し出すとＴｈの手だけを見て寄ってきた。トランポリンの上でＫ君は目を閉じて柔らかい表情をしていた。動きも柔らかく、緊張や身体の硬さが少しずつとれてきたように思われた。＃９ではＴｈがトランポリンを揺らすと、両手で膝を抱えて体育座りをしてリズムよく身体を揺らした。Ｔｈが揺らすトランポリンの動きにＫ君の身体の揺れが重なりあっているように感じられた。

第２期　＃10（６歳４ヶ月）～＃18（６歳６ヶ月）―描画の枠と情動表出とＴｈの行為（身体）と自分の行為（身体）を重ねる―

＃10では玩具の置いてあるテーブルの上の画用紙が目に入るとヒョイとトランポリンを降りて色塗りを始めた。クレパスを手に取り、枠を描き、その枠内に色を塗り始めた。Ｔｈが後を追ってＫ君の傍に座るとＫ君は背を向けて画用紙を隠した。＃11ではクレパスの色を時間をかけて選び、そして枠を描き、そしてその中に色を塗ることを繰り返した。ＴｈはＫ君から離れて同様に枠を描いて、その枠の中を塗ってみることにした。それまでＫ君はＴｈに何の反応も示さず絵を描いていたが、しばらくすると、チラッ、チラッと視線を向けるようになった。＃12ではＴｈも色を塗ることにした。Ｋ君は自分の絵を描くことに集中していたが、しばらくすると、手を休めてＴｈの傍に背筋を伸ばして座り、身をのり出してＴｈが描いている絵をじっと見るようになった。自ら寄って来るようになり、それを契機に描画を一緒に描くようになった。＃15ではＫ君はいつもの位置に座り、画用紙を置いて絵を描く用意をした。同様にＴｈもその傍に座り、用意を済ませる。するとＫ君は傍に近寄って来て座り、Ｔｈの前に自分のクレパスを置き、背筋を伸ばして画用紙を覗き込んだ。そのクレパスで長方形の枠を描きその中を塗ってみた。Ｋ君は身体を揺らしながら真剣な顔でＴｈが描く絵を見ていた。自分が絵を描いている時のように「うーうー」と声を出し、身体を動かした。徐々に情動が高ぶってくるとじっと座っていることができずに、「うーうー」と声を出しながら立ち上がった。Ｔｈの身体とＫ君の身体が響き合っているように感じた。しばらくするとその場を離れ、トランポリンで遊びに行くが少し離れたところからＴｈが描いている姿を見ている。Ｔｈの姿（身体）を見ることで絵を描く自分の姿（身体）を客観的に見ているようであった。＃16では長方形の枠を描いた。Ｔｈにもクレパスを差し出して色塗りをするよう要求してきた。Ｔｈが色を塗っている間、その場を離れて遊ぶようになった。Ｔｈの手の動きが止まると色を塗り終えたことを察知して近寄ってきた。そして自らクレパスをもって補修した。

第３期　＃19（６歳７ヶ月）～＃28（７歳１ヶ月）―トランポリンの枠のなかでの身体を通した〈能動―受動〉と情動の昂進と鎮静―

＃19ではトランポリンの上で跳んでいるとＫ君の情動が高まり、Ｔｈの動きやＴｈからの働きかけに気持ちが向いているのを感じた。Ｔｈは、彼にそっと寄り添い身体に触れてゆっくりと身体を揺らしてみる。徐々にＴｈの身体の動きに慣れて、Ｔｈの揺れに添うようになった。緊張が抜けて身体が開かれていくように感じる。＃20ではＴｈがＫ君の手に軽く触れるとしっかりとＴｈの身体を見る。手を離して、しばらくして、再びそっとＴｈがＫ君の手に触れようとしたら、手を引く。Ｋ君の手に触れようとすると、Ｔｈを見て笑い、手を引こうとする。視線をＴｈに向け、Ｔｈが手を指し出すのを待ってる。やがて手をタッチすると「きゃっ、きゃっ」と笑い、次はＫ君もＴｈがしたように触れてくる。＃21では身体を絡ませて足を組んで引いたり、引かれたり、手をタッチしたり、タッチされたりして遊ぶ。情動が昂進していくなかで、すぐに手をタッチせずに意図的に間を

とり、K君が投げかけてくる情動をしっかりと受け止める。情動の昂進とともに気持ちをＴｈに投げ込んでくる。するとK君の情動は鎮静していく。K君の身体に生気がやどっていくような印象を受ける。＃22、K君はトランポリンで足を大きく開いて跳んでいる。Ｔｈが跳ぶと横になって振動を楽しむ。徐々に勢いをつけて跳ぶとK君の身体も徐々に高く宙に舞う。バランスを崩してトランポリンのふちに頭を打つ。頭をおさえ急に表情を変える。そこで〈痛かったね〉とＴｈがその痛みを受け止めると身体を預けてくる。しばらくすると笑い始める。手で頭をガードしながら跳ぶ。Ｔｈが体育座りをしているとそれを見たK君も同じように座り関わりを求めてきたので、その身体を受け止める。そしてゆっくりとＴｈの方へ引き寄せてからリズムよく身体を揺らすと「きゃっ、きゃっ」と喜びの声をあげた。＃23、Ｔｈが身体をゆっくりとさすると情動が昂進して笑いが止まらなくなった。Ｔｈの身体に抱きつき興奮を沈静させようとしばらくじっとしている。落ち着く。再び、Ｔｈが離れたところからK君の身体に触れようと構えただけで、K君の身体が反応し笑い出す。するとＴｈが目を離した隙に、こちらの様子を伺っていたK君はそっと四つん這いでトランポリンから降りようとする。トランポリンの縁まで行って立ち止まり、Ｔｈの方を振り返って何度も様子を伺った。K君は自分の示す行動をＴｈがしっかりと受け止めているかを確認するかのように、Ｔｈの動きを見る。そしてＴｈが見ていると分かると笑う。＃24ではK君はじっとＴｈの身体の動きを見ている。Ｔｈがトランポリンを跳びながら〈パン、パン〉と手を叩くとK君もそれを見て手を叩く。次にＴｈが手を拡げて跳ぶとK君もすぐにその動作を真似た。＃25、K君は手を引きＴｈをトランポリンに上げ、積極的に近寄ってくる。K君が来ると身体を押し返す。するとK君は勢いよく体当たりをしてくる。そこでK君を受け止めて再び押し返す。これを繰り返すとそれが楽しくなって笑う。Ｔｈの身体に自らの身体と情動をぶつけてくる感じがした。＃26、Ｔｈがトランポリンに乗って跳び始めるとK君はマットに座り、振動を楽しむ。Ｔｈが隅に座っているとK君は座りながら足元に近寄ってくる。次は反対側の隅に移動するとそれを見て追いかけてくる。＃28になるとＴｈの手を引き、身体をしっかりと抑えて、持ち上げるよう要求するようになった。Ｔｈが身体を持ち上げ、上げ下げを繰り返すと興奮が高まっていく。放出された感情が受け止められ、そして身体のまとまりを体験しているようでもある。K君を持ち上げ、顔の前で彼の身体の動きに「はっ、はっ」と声をあわせてみた。すると、K君も自ら「はっ、はっ」と身体の動きに声を合わせた。

日常生活においても母親の言葉かけに気持ちを向けるようになり、母親が自然に話しかけられるようになった。自らの行動に対する他者の反応を伺う行動が見られるようになった。

第４期　＃29（７歳２ヶ月）～＃157（11歳10ヶ月）―描かれた枠と身体像の誕生―

４－①　＃29（７歳２ヶ月）～＃45（７歳８ヶ月）―波線の枠の描画と遊びの拡がり―

＃34ではＰ．Ｒ．に隣の部屋のＣｌが入ってきてしまう。「うーうー」と怒りを露にし興奮する。その情動をぶつけるかのように力強く波線の枠を描く（図１）。＃35ではK君の傍で同様に波線の枠を描くと興味を示してくる。クレパスをK君の画用紙の前に置くと、Ｔｈの描いた波線の枠の中にはみ出すことなく色を塗る。Ｔｈが枠を描きその中をK君が色を塗るやりとりが続く。

４－②　＃46（７歳９ヶ月）～＃69（８歳10ヶ月）―情動表出遊び、および身体接触の増加と授乳―

＃46ではクレパスを手に持っても絵を描かずに文字を書くことが増えた。遊びはレジスターを叩いたり、もぐら叩き、サメ叩きゲーム等ゲームが増えた。また、＃48から時間が

残っているにも関わらずＭｏがいる待合室へ戻り、Ｍｏに抱きつき膝や胸に手で触れる等身体接触が著しく増加した。＃61からはＭｏの胸に手を触れた後、Ｔｈの胸にも手を触れ、反応を伺い笑うようになった。

４－③　＃70（８歳11ヶ月）～＃76（９歳２ヶ月）―身体像の萌芽―

＃70では画用紙を見つけるとＴｈに何か描くように要求してきたので、枠を描きその中を塗ってみる。それをじっと見ていたＫ君はＴｈが使っていたクレパスを手に取り、色の塗ってある部分をさらに強く塗る。次は波線で枠を描いてみる。感情を入れて力強く色を塗るので画用紙が破れてしまう。感情が高ぶっていて、しばらくして、画用紙の上にＫ君はクレパスを使わず自分の指で人の顔と胴体を描く。Ｔｈはそれを真似て人の輪郭を描く。Ｋ君はその輪郭の中に色を塗るが目と鼻と口、胴体には色を塗らない。この頃からクレパスを持ち帰ろうとする。また、この＃70からエレベーターに人形を乗せて上げ下げする遊びに興味を示すようになり、それを何度も繰り返す。＃71、＃72では玩具の家に屋根に描かれた数十個の二重丸の模様を見つけ、気持ちがかき立てられるように色を塗る。＃73、クレパスをＴｈに渡して、画用紙に人の顔、髪の毛、身体の輪郭を描くように指で画用紙をなぞって要求してくる。Ｔｈが顔、髪の毛、身体の輪郭を描いた後にクレパスを手に取り色を塗り始める。まず髪の毛を黒く塗り、次に目を黒く塗り、身体を赤く塗るが途中で色を塗ることを止めてしまう（図２）。クレパスを持ち帰ろうとしたので１本だけ持って帰ってもらう。

４－④　＃77（９歳３ヶ月）～＃89（９歳６ヶ月）―楕円型枠の変化と部分対象の統合の兆し―

複数の楕円様の形を描いてその中をそれぞれ色を変えてクレパスで塗る。枠外の背景も絵の具を使って色を塗るようになる。時々手を休めて考えながら絵を描いている。＃77では枠を描いてその中を塗った楕円形を複数作る（図３）。＃79ではその楕円形が接して１つとなる（図４）。

４－⑤　＃90（９歳７ヶ月）～＃96（９歳８ヶ月）―身体像の表出―

思うように描けないと興奮して画用紙を破ることが増えた。＃90、青色のクレパスで長方形の枠を描き、その中を三色ペンを使って力強く塗る。＃96ではピンク色の波線の枠を描き、その中を様々な色で塗り分けるが中には枠は描かない。とても情動の高ぶっている様子が伝わる。２枚目は黄色の波線の枠を使う。この場合も枠内に枠を分割することなく様々な色を塗り分ける（図５）。次第に興奮状態がピークとなる。３枚目に人の顔を大きく描き、胴体、手、足を描く。その人物画にも様々な色を塗る（図６）。すると興奮が少しずつ鎮まっていく。４枚目の枠は鉛筆で丸みのある楕円形を描き、その中を様々な色で塗る。

４－⑥　＃97（９歳９ヶ月）～＃115（10歳３ヶ月）―幾何学的な枠の変化と〈排便－授乳〉―

＃108では１枚の紙に対してひとつの枠を描き色を塗る。それを８枚描く。三角形の角がとれて丸みをおびてきた。遊んだ後におならをしたりトイレで大便をすることが増えた。待合室では母親の胸に手で触れたり顔を押し当てたりする。

４－⑦　＃116（10歳４ヶ月）～＃132（10歳８ヶ月）―ドラえもんへの関心―

高さ１ｍ程の空気が入ったドラえもん型のビニール製人形に興味を示し、絵を描くことが見られなくなった。特にドラえもんの空気を入れたり、抜いたりすることがよく見受けられた。＃116ではドラえもんを引きずってプラレールの前まで運び、ドラえもんの前でプラレールで遊ぶ。また、小さなドラえもん人形を持って来て嬉しそうに見ている。＃117ではドラえもんを引きずって連れまわす。Ｐ．Ｒ．内にあるドラえもんシリーズのキャラクター人形を勢ぞろいさせて見ている。＃118ではドラえもんの空気を抜いて持ち帰ろ

うとする。＃119から＃123では家から小さなドラえもんを持って来て、空気の入ったビニール製のドラえもんの傍に置く。

4－⑧　＃133（10歳9ヶ月）～＃157（11歳10ヶ月）―身体像の誕生と表情の分化―

K君はこの頃から、一層顔も身体もふっくらと丸みをおびてきた。K君の描く枠も角がとれて丸みをおびてきたように思われた。この頃、プレイの時間の途中にプレイルームを抜け出してトイレに行って大便をして戻ってくることが増える。＃150では枠を描かず、青色のクレパスで画用紙の余白を残さずに塗り潰す。＃152では人物画を描く。まず顔の輪郭を描き、その中に目と口と眉を描き込むが鼻がない。そして髪の毛、胴体を描き、その後に足と手を描く．最後に全体の色を塗る。顔は肌色だが手は肌色では塗らない。緑色と青色の人物画を2枚描く。＃157でも2枚の人物画を描く。毎回2枚の身体を描き緑色と青色で塗る。しかし、口や目の大きさはその都度変化し顔の表情が豊かになっていくような印象を受ける（図7）。

2．事例1の小考察

第1期では、自販機の玩具で長時間遊ぶなど自閉症的な固執した遊びが見られた。その遊びに没頭することで周りからの刺激を遮ったり、Ｔｈとの関わりから身を守っているように思われた。それは、彼なりの外枠作りによる適応の形と言えよう。しかし、自販機の操作が上手くいかなくなった時など、必要に応じてＴｈと視線を合わせずにＴｈの手を道具のように使うようになる。そのような関わりから、K君はトランポリンへと興味が移る。第2期に入ると、長方形の枠を描くことが増え、そこにＴｈも関わることで枠の中に感情を入れるように枠の中を塗る。トランポリンの中で生じた枠の中での関わりが、画用紙の中の枠へと広がっていく。第3期に再び、トランポリンの枠での関わりにおいて身体を媒介としたやりとりが生じるとともに、浜田（1992）の言う〈能動－受動〉のやりとりが見られた。手を引き合うことによって、引いている他者の身体を感じながら〈能動〉、引かれている自分の身体を感じる〈受動〉。次は逆に自ら引くことによって他者の身体を感じ〈受動〉ながら、自分の身体を感じる〈能動〉などのやりとりが見られるようになる。それから〈叩く－叩かれる〉、〈見る－見られる〉、〈声を出す－声を聞く〉等の〈能動－受動〉のやりとりと同時に、身体と身体とを重ね合わせる行動が見られるようになる。自他の身体の感覚を感じているようである。第4期に入ると、絵に没頭する。枠を描きその中に感情を入れ込むようになる。＃34ではＰ．Ｒ．に隣の部屋のＣ１が入ってきてしまう。「うーうー」と怒りを露にし興奮し、その情動をぶつけるかのように力強く波線の枠を描く。授乳時のように怒りがスーッと抜けていくようである。その頃から、時間が残っているにも関わらずＭｏがいる待合室へ戻り、Ｍｏに抱きつき膝や胸に手で触れる等身体接触が著しく増加し始める。＃61からＴｈの胸にも手を触れ、反応を伺い笑うようになった。内的な＜排便－授乳＞を体験しているようである。＃73、クレパスをＴｈに渡して、画用紙に人の顔、髪の毛、身体の輪郭を描くように指で画用紙をなぞって要求してくる。Ｔｈは要求通り描くと、K君は色を塗りかけたが途中で止めてしまう。＃77では枠を描いてその中を塗った楕円形を複数作る。＃79ではその楕円形が接して１つとなり、＃96では身体像が誕生する。その様は部分対象が全体対象へと変化し、１つの身体が統合されていく過程として考えられる。その頃、枠も三角形の角がとれて丸みをおびるとともに遊んだ後におならをしたりトイレで大便をすることが増える。待合室では母親の胸に手で触れたり顔を押し当てたりすることが再び増える。ドラえもんに興味を示し同一化する。＃157では表情が豊かな自画像が生じる。これらの変容過程は、外的な枠としての身体を通した関わりと内的な枠として〈排便－授乳〉過程が密接に絡み合って身体像が生じてくることを示

していると考えられる。

3．事例2の経過

第1期　色や数字に固執する自閉的な枠（#1～5、2歳8ヶ月～2歳10ヶ月）

#1では、本人なりのルールでボールを並べたり積み木を高く積んだりして遊ぶ。#2では赤色、次に黄色、そして青色の積み木を積む。次は色のついたボールに目がとまり、赤色、黄色、緑色の順番に砂の上に並べる。A君はThと目を合わせることはなかった。独得の無力感を感じながらもじっくりと関わっていくことにする。#3では赤と黒のなぐり描きで絵を描く。描き終えるとThの前で手を挙げる。Thも手を挙げる。使ったクレヨンを両手で持てるだけ持とうとするが落としてしまう。クレヨンを減らすことなく、必死に両手で持とうと繰り返すが持てない。色のついた積み木を積んでいくが積みすぎて崩れてしまう。そのような姿にA君の苦しさを感じた。#4－#5では、卓上カレンダーの数字をじっと見ている。信号機にも興味があり上下、左右様々な角度から見ている。Thのデジタルの腕時計に気づくと吸い込まれるように身を乗り出してじっと見ている。

第2期　描画の枠と情動の表出（#6～15、2歳10ヶ月～3歳2ヶ月）

#6では、卓上カレンダーの数字を見ている。ThがA君に見えるように数字を描くと興味を示し、覗き込んでくる。Thの手を引いて腕時計を見る。しばらくじっと見ていたが視線が腕時計からThの顔に移る。ジーッと顔を覗き込み、そして自分の口を動かす。Thも同様に口を動かしてみるとそれを珍しそうに見ている。#7では、箱庭の砂に手で触れる。砂を両手ですくって箱庭の枠外に撒き散らす。しばらくするとウンチをもらして動かなくなる（母親面接（以後、母親）－まねをすることが増え、○を描くと○、△を描くと△を描く）。#8－#10では、交番を取ってドアを開け閉めする。電話ボックスの中を見ている。クッキーモンスターの口の中に手を入れる。（母親－「いやだ」と言うことも増えた。‘おしゃべりドラえもん’が気に入ってボコボコと叩くようになった。［何か食べたいな～］とドラえもんが言うとそれを真似て「何か食べたいな～」と言う。今は遊びの最中に母親を振り返ってみるようになった。）#11では、Thが口を尖らせるとA君も口を尖らせてくる。Thを見て目を細める。ThもA君を見て目を細める。Thが画用紙に茶色のクレヨンで枠を描く。A君は赤を選んで、「あかね」と言いながら枠の外を描く、次は緑を選んで「いとい」と言いながら描く。最後に枠の中を力強く緑で描く（図8）。画用紙を変えると勢いよく自ら描き始める。「う～う～」と声を出しながら描く。次第に情動がこみ上げてくると立ったり座ったり、身体を揺らしながら描く。2枚とも薄い枠のようなものが見える（図9）。3枚描き終えた後に、Thが画用紙に二重の枠を描いてみる。するとA君はThに黒のクレヨンを渡して、色を塗るように要求してきたので、2つなぐり描きをする。A君はしばらくそれを見ている。#12ではThが枠を描くと「いち」「いち」というので数字の‘1’を書くと手を叩いて喜ぶ。すると画用紙の下部を指差して「いち」というので‘1’を書く。クレヨンを差し出すと丸くなぐりがきをして、一本の線を描きこむ。#13－#15では、サイコロで出た数字をThがよみあげるまで視線を向けて待っていて、Thが数字をよむと数字を変える。ミニバスケットボールの穴に「赤」「黄色」「いたい（緑）」と言いながらボールを色別に並べる。並べ終えるとThの方を見る、そしてそれを壊す。Thが画用紙とクレヨンを用意するとクレヨンをThに渡して「マル」と言う。マルを描くと次は「サンカク」「シカク」と要求してくる。Thが要求に応えると図版を持ってきてThの書いた円の上に円型を、三角には三角型の図版を置く。（母親－ボーリングのピン等も順番に並べて崩すのだけど、人に壊されると泣く。友達に嫌なことをされ

ると「いやー、いやー」と言ってすぐに泣いてしまう。助けを求めてくることは増えた)。

第3期　Ｔｈの表情（身体）と自分の表情（身体）を重ねる（#16～25、3歳2ヶ月～3歳5ヶ月）

#16では、サイコロに興味を示す。転がして出た数字を「いち」「に」とよむ。よみながらＴｈの方を見る。A君が見た時にＴｈが別のサイコロを転がしてみると'5'が出る。それを見ていたA君は自分のサイコロも'5'にして、Ｔｈが転がした数字と自分のサイコロの数字を合わせる。#17－#19では、調子が悪く待合室で泣いていてもプレイルームに入り信号機を見ると落ち着く。ミニカーを4台並べてその前に信号機を置く。Ｔｈの顔を見て自分の表情を変える。Ｔｈが顔にしわを寄せるとそれをじっと見ている。#20－#22では、Ｔｈの顔に触れてくるようになる。Ｔｈの顔を見て、A君は自分の顔を作る。ＴｈがA君の顔に触れると、A君もＴｈの顔に触れる。Ｔｈが自分の鼻に手を触れるとA君も同様に自分の鼻に手を触れる。#23－#25では、終了を告げると慌てて積み木を積み始める。高く積み上げると崩れてしまう。すると、「消えた、消えた」と大きな声で泣く。Ｔｈが棚を支えにして積めるようにすると無事に積み上げる。場合によってはＴｈが支えながら積んでいくとA君はそれをＴｈに任せて見ている。泣きやみ、帰っていく。

第4期　情緒的交流と〈排便－授乳〉（#26～42、3歳5ヶ月～3歳11ヶ月）

#26－#28では、サイコロの数字を1から順番に見たり、サッカーの得点板の数字を順番に見る。クレヨンでなぐり描きをしたり、信号機を立てて、その傍をミニカーを通して遊ぶ。ままごとをするようになった。皿の上にジャガイモをのせたり、塩とこしょうを持って、パッパッとかけたりする。#30－#34では箱庭で遊ぶこともあり、小さな人形を使って砂の上を上下左右に歩かせる。（母親－車のナンバープレートを覚えていて書く。）#35－#42では、鏡に向かい信号機を手に持って「信号青だよ。待っていてね」と言ったり、'おしゃべりあいうえお'から音声が流れ'あを押してね'と言われるとすぐに「あ」を押す。正解するとＴｈが手を叩く、するとA君も嬉しそうに拍手する。答えの文字を押す度にＴｈの反応を見る。手でおちんちんを押さえると待合室のお母さんに連れられてトイレに行く。（母親－枠を描き、その中に平仮名を描く。A君の書く文字は見たままの形を写している。赤色を使って郵便車を描く。ウンチをもらしてしまうと身体をくねらせてポーズをとるようになった。トイレでウンチが出たとき「上手にできたね」「良かったね」と褒めると喜ぶ。自ら鼻がくっつくぐらい顔を近づけてきたり、スキンシップを求めてくるようになる。）

第5期　身体像の萌芽と表情の分化（#43～48、3歳11ヶ月～4歳2ヶ月）

#43－#45では、壊れた信号機を手にもっている。信号機が壊れているととても不安なようで「はい」と言ってＴｈに手渡す。信号機を直すと嬉しそうに見ている。途中でトイレに行きたくなることが増え、一人で走っていく。（母親－'わくわくおえかき（枠で囲まれたお絵かき板）'に信号機の絵や人物の絵を描いている。人物画は○や×を描き、その後に顔を描く（図10）。ナンバーよりも車そのものに興味がある。）#46では、野球盤の小さな球を集めたり、それを口にもっていってＴｈの反応を伺ったりする。鏡に映った自分の顔を見て、表情を変えている。鏡を見ながら、動物のように手を使わず口で球をくわえたり（狐さんになっている）、落としたりを繰り返す。（母親－発表会で動物のお面を使って劇をすることになった。A君はみんなが練習している姿を見て、「A君もする」と言って自主的に参加する。狐の役になりきり［狐さん］と呼ばれると「はい」と返事をしたりする）#47－#48では、風船に興味を示し、Ｔｈに

空気を入れるよう要求してくる。そして、その空気を抜いて遊ぶ。積み木を積み上げていく。崩れてしまってもパニックになることはなくなった。

第６期　鏡への興味、同一化と枠（＃49～75、４歳２ヶ月～５歳）

＃49－＃56では、鏡に向かって手で赤色、青色、黄色の玉と細い小さな棒を手に持って信号機を作ったり、「狐さん」になって砂時計をくわえている。風船を膨らませて鏡を見て笑う。鏡に顔を近づけ、表情を作って覗き込んだり、口を動かして鏡に映った顔を角度を変えて見たりしている。横目で鏡を見たり、「あー」と口を開けたり、笑ったりする。Ｔｈの動きや形を見ている。鏡を通してＡ君の背後に座っていたＴｈを見た後に振り返ってＴｈを見る。キョトンとした表情でＴｈを見ている。（母親－トイレの気配を感じた時、トイレに連れて行くことを心掛けたら、話の最中に「トイレ」と伝えるようになった。Ａ君が「名前は」と名前を聞くよう要求してきたので聞いてみると「僕の名前は…」と言って友だちの名前を言ったりする。（母親－妹の予防接種があってそれを見ていたＡ君が「注射痛かったね」と言いながら泣き出した。相談室に向かう車の中で初めて「先生のところに行くの」と聞いてきた）。＃58－＃61では、「ねぇ、浦崎先生」と言いながらＴｈの横に来るようになった。砂時計の砂が流れるのを見ている。砂が全部流れると「なくなっちゃった」と言う。それを何度も繰り返す。積み木で塔のようなものを作って帰ることが続いた。＃62－＃63では、象をもって「僕は象さんだよ」と言って遊ぶ。次はＡ君がトラを持ってきたのでＴｈは象を動かす。トラ（Ａ君）に軽く触れると「いたいよ」「いたいよ」と言う。次にＡ君はカバを使って「食べちゃうぞー」と言ってＴｈの象に噛み付く。〈いたいよ〉〈いたいよ〉と象（Ｔｈ）が叫ぶとニコッと微笑む（母親－外で歩いていると突然、道路にある白線の前に立ち止まり、片手を上げて「チカ、チカ……」と言ったりする。運転手というよりも車そのものになっている）。＃64－＃68では、ドアを開けたり閉めたりを繰り返すことが増える。戻ってくるとＴｈの膝の上に座る。ハム太郎を車に見立てて遊ぶ。信号機の前を動かしたり、信号機を赤に変えて止まらせたりする（母親－見知らぬ家に行った時も車になって家の中を同じルートでクルクルと２時間程動いた。時々戻ってきて母親の目を覗き込んでくる）。＃69－＃71では、部屋に入ると鍵をかけて、妹や母親を部屋に入れようとしない。Ｔｈが画用紙に枠を書くと、Ａ君は枠のなかに「あ・い・う・え・お」と書く。＃72－＃73では、棚から信号機を持ち出し、傍に置いて遊び始める。鏡を見るが鏡の中の自分を見ている感じではない。鏡を見てその背後を見ている印象を受ける。鏡を見ながらＡ君が口を開けて形を作るとＴｈも鏡に見えるように口を開けてみる。またＡ君が髪をかきあげるとＴｈもかきあげてみる。鏡に映ったＴｈと背後にいるＴｈを交互に何度もみる。＃74－＃75では、部屋に入ると鍵をかける。身体を床にうつぶせに伏せて足をパタパタとさせながらＮＨＫの幼児向け番組のキャラクターしゃくとり虫の「シャッキー」になりきっている。（母親－ハム太郎になりきっている。口調を変えてしゃべったりする。［お名前は］と聞かれて「わからない」と応える。また、園での劇の練習の後、狐役のＡ君は名前を聞かれて「僕は狐です」と応える。）

第７期　身体像と創造性（＃76－99　５歳～５歳８ヶ月）

＃76－＃77では、置いてあったビデオカメラを覗いてＴｈを見ている。カメラを通して画像を見たり、カメラを通さずにＴｈを見たりする（母親－母親の都合で休んだ時、「うらさきせんせいところへ行く」と言って泣いた）。＃78－＃81では、鏡に映ったＡ君を指して＜誰？＞と聞くと応えが返ってこないが、たまに「Ａ（フルネーム）」と応えるよう

になる。ビデオカメラに自分の顔を写し自分を見て隠れたりしている（母親－Ａ君に家で飼っているウサギの写真を見せて［誰］と聞くとウサギの名前はしっかり応えるが、自分の名前は自ら言わないことが多い）。＃82では、Ａ君は両手でハム太郎の目を隠す。手を下げて目をオープンにする。「ハム太郎すごい」「倒れちゃった」「痛いよ、痛いよ」〈痛いの、痛いの飛んでいけー〉「痛いの飛んでいったー」〈飛んでいったねー〉「あれー落ちた」〈落ちたー〉ハム太郎を倒す。〈痛いの、痛いの、飛んでいけー〉「飛んでいったー」目の前にハム太郎をもってきて自分の顔を隠す。ＴｈがＡ君の顔を手で隠して「いない、いないバー」をする。ハム太郎を見て「それは耳だよ」〈これは〉「これは目」〈これは〉「それは鼻」〈これは〉「先生」〈これは〉「Ａ」と自分の名前を答える（母親－ハム太郎になりきると母親のことを「ロコちゃん」と呼ぶ。日頃はなぜか「あんざいちゃん」と呼ぶようになった。ウサギになりきってピョンピョンと跳ねている。色のついた折り紙を切り抜いて貼って信号を作っている。写真を見ながら粘土を使ってテレビのキャラクター、毛虫のニッキーや家で飼っているウサギを作っている）。＃87－＃89では、バイキンマンに興味がありビデオでやりとりを覚えていて、赤と黒のサイコロを使ってキャラクターに見立てて遊ぶ（母親－バイキンマンの絵を描く。顔には×印を描いている。）＃90では、絵で描かれたぞう、すいか、ライオンのお面を持ってくる。ビデオカメラに自分の顔を写して見ながらお面を合わせる。「これ、なーんだ」〈象さん〉、次はＴｈに仮面を被せたり、ドラえもんに被せたりして見る。自分も被って見たり頭の上に仮面をずらして見たりする。仮面を被った姿を様々なパターンで見ている。自分の姿も見ている（母親－ライオンを見て「怒っているね」と言っている。ドラえもんを描くと眉毛を吊り上げて怒った表情を作る。トイレも失敗がなくなってきた）。＃94では、猿かに合戦の絵本を思い出して「ほらほら、赤いリンゴを投げつけました。かには潰れてしまいました」と言うと困ったような顔でＴｈを見る。〈痛かったね〉と言うとリンゴを頬に当て、そして、痛そうな表情でＴｈを見る（母親－自分のことを‘僕’と表現することが増えた）。＃95－＃97では、Ｔｈが四角い枠を描くとそのなかに目と口の絵を描き「これ何だ」とＴｈに聞いてくる。ライオンの絵を描く。顔の輪郭と目と身体を描くが、口が上手く描けずに何度も描き直す。（母親－「水曜日は浦崎先生」というふうに覚えていて、「今日は？」と聞いてくる。［浦崎先生］という応えを待っている様子。）＃99では、Ａ君とＴｈが鏡に映っているのを見て〈これは〉と聞くと「浦崎先生」〈これは〉「キャベツくん」もう一度同じように聞いてみると〈これは〉「浦崎先生」〈これは〉「僕」と応える。部屋を暗くして赤色灯を回す。真暗な中赤い光を見て「怖くなーい」と言う。〈怖くないんだー〉「怖くない」Ｔｈの膝の上に腰を下ろして、‘わくわくおえかき（枠で囲まれたお絵かき板）’にＮＨＫの幼児向け番組に出てくる‘オラガーバ’を描く（図11）。（母親－テレビ等で人の表情を見て笑う。Ａ君は母親に「‘笑った顔’は」「‘怒った顔’は」等と表情を描くよう要求してくる。表情の絵が描いてあるサイコロ（幼児向けの本の付録）が気に入り表情を覚えた。）

その後の保育園での様子－運動会が終わった後にリレーの絵を描いてもらうと、バトンをもって走っている自画像を描いたとのこと（図12）。その後、動物園へ行った時の絵も描く。キャベツくんの絵本に出てくる象をモデルに描く。保育園で老人施設へ行った後、おじいさんの絵というテーマで絵を描いた。Ａ君は‘おじいさん’というテーマから‘おじいさんの古時計’を連想し、保育園のお気に入りのからくり時計を描いた。どの絵にも笑った顔の自分を描いている。

４．事例２の小考察

第１期では、Ｔｈにはわき目も振らずに色

のついた積み木を並べたり、ボールを並べ秩序を作って、自分を守るための自閉的な枠を作る。＃３では、クレヨンを持てるだけ持とうとするが持てなかったり、積み木を上手く積めなかったり、自閉的な枠が上手くできない苦しさが見られた。第２期では、Ｔｈが枠を描くとその枠の内と外に殴り描きをする。その後、自ら薄い枠を描き、「うー」「うー」と興奮しながら殴り描く。自らの枠を微かながら描くことが可能となっていく。第３期では、Ｔｈの表情（身体）と自分の表情（身体）を重ねる行動が見られるようになり、他者が鏡となり個としての他者の身体を発見する。すると、第４期においては、母親とのスキンシップが増え、かつトイレで大便が可能になるなどの情緒的交流や〈排便－授乳〉が生じるようになる。内的な枠としての器ができ始める。そして第５期では、身体部分に○や×を使った人物画が生じる。鏡を通して狐になった自分の姿を見るなど身体像の萌芽が見られる。第６期では、鏡への興味が一段と増し、自分の顔や表情を鏡に映して表情を作るようになる。Ｔｈの名前も言えるようになる。第７期では、自分が運動会に参加している絵を描き、鏡に映った自分の姿を見ながら、自分の名前を言えるようになる。これらの経過は、枠を描くことから枠としての身体が形成されていく過程を示していると考えられる。

Ⅳ．総合考察

自閉症児とのプレイセラピーを通して生じてきた「枠」は幾つかの異なる意味をもっていると考えることができた。ここでは、生じてきた「枠」を、身体の外枠を作る外枠作りと内枠を作る内枠作りという大きな２つの概念に分けて考えてみる。自閉症児に対する治療や教育は、適応のためのスキル、認知能力の獲得、コミュニケーション能力の促進などの社会生活的かつ外的世界におけるアプローチと、山上（1999）が述べるように内的世界に目を向け、自我を守り支えていく心理療法による精神生活的かつ内的世界におけるアプローチに分けられる。前者は社会的な生活世界を広げていく枠作りである。後者は、生活世界を広げていく自閉症者の内的世界に入りこんで、その社会への適応や世界と向き合うための能力の変容を内側から共感的に支えていくための枠作りである。プレイセラピーはこの後者の枠作りに重点をおいている。ここでは前者の外的世界における外なる過程の形成を「外枠作り」、後者の内的世界における内なる過程の形成を「内枠作り」として、枠について考えてみたい。渡辺（1988）は枠という概念を精神分裂病の心理療法を通して考察している。それによると「枠とは、他者の圧倒、侵害に対して人間が己であることを守り、保持し、他者ならざる自分として己を維持するための社会的、心理的、身体的防衛壁のことを指している」と定義している。ここでも、渡辺の枠の概念に沿って考えていきたい。自閉症児に対するどのような治療教育的なアプローチであれ、自閉症の内的世界（Williams, 1992）が恐怖に満ちていることが報告されたことを考えると、彼らが生きていく上で安全感を重要視しなければ、本当の意味での実りある治療教育の方法とは言えない。従って、安全感を作る、または身につけるということに着目すると「枠」という概念で自閉症児の発達を捉えることが可能になってくる。発達の初期段階は、認知発達と自我発達が同じ発達過程の異なる側面として発達するように、その両側面に目を向けて関わっていくことが大切である。

渡辺（1998）は「人間の身体というものは、外見的には容姿、容貌として、より本質的には他者ならざる自分の存在の砦として、他者と己とを分け隔ち、己を守る最も基本的な、重要な枠性を所持している」と述べている。ここでは、渡辺の述べる身体のもつ枠性を外枠と内枠に分けて、直接的な関わりにより彼らに与える身体の変容を「身体の外枠作り」とよび、自らの体験した感覚が、自己感とし

て感じられる身体の内的変容過程を「身体の内枠作り」とよぶことにする。

1．身体の外枠作り

1）枠の意味（自分を守るための行為としての枠）—自閉の殻、こだわり行為、同一性保持—

こだわり行為や同一性保持などの自閉症児症状は、現実世界で自分の身を守るための彼らなりの防衛行動であり、また生きていく上での適応行動と捉えることができる。プレイルームの中においても彼らの自閉の殻とも呼べる行動が見られた。

① 自閉症児が見る対象としての物体を発見する

K君は、Ｔｈとの間合いを保ちながら自販機の操作を繰り返す。初めてのプレイルームという空間に身を置き、その場所に自分の居場所を見つけようと興味を示し、自販機にのめりこむ（事例１、＃１～３）。A君も同様に色に興味を示し色別にボールを並べたり、色のついた積み木を積み上げていく。興味を示しているものに一体化しているようである（事例２、＃１～３）。Ｔｈの身体から身を隠すように自分の身体を興味の対象に向けている。Ｔｈはその様子を見守る。

2）枠の意味（自分を守る場としての枠）—他者の存在が必要とされる共有の場—

自分を守るための固執対象を見つけ、そこが身を守る場としての枠となる。固執対象が増えていくにつれて自分の安全な領域が広がっていく。

② 自閉症児の見る対象が変化する

自閉症児の見る対象が変化していくのを感じる。A君の興味の対象が変化し、色のついた物への興味から卓上カレンダーの数字に没頭するようになる。さらに、興味はＴｈの腕時計へと変化していく（事例２、＃４～５）。Ｔｈの身体にある腕時計へと興味が移行し、さらにそこでそのものとの関わりが１人では満たされなくなると、あるいはものとの関わりが上手くいかなくなると、K君、A君の傍にいるＴｈの存在が必要となってくる。K君は自販機の操作が上手くいかなくなると、Ｔｈの手をその対象としてのものとの関わりのなかで使用する。そうすることで、Ｔｈは必要な存在となっていく（事例１、＃２）。Ｔｈは彼らの興味を構成する援助者として関わっていく。K君は、＃５でマジックを使って枠を描き、その中に十字を描き込んだ。それは、彼の中に守りが生まれてきたことを示している。興味の対象が増え、広がっていくにつれて守りのある場所は広がり、自分を守る場が生まれる。そこで、Ｔｈと自閉症児がともに場を共有するようになっていく。興味の対象がある空間に自分を定位していく。

3）枠の意味（自分を守り、関係を繋げる枠）—他者との融合—

身体を意識した関わりが必要となってくる。彼らは自分を守る枠組みの中で他者との関係を膨らませていくのである。

③ 自閉症児を守るための枠を形成する

K君は自らを守るための枠を描き、傍に座っていたＴｈに背を向けてその枠内に色を塗り始めたり（事例１、＃10）、A君も、Ｔｈが枠を描くとその枠の内と外に殴り描きをする。その後、自ら薄い枠を描き、「うー」「うー」と興奮しながら殴り描く（事例２、＃11）等の行為が見られた。さらにA君は、「マル」「サンカク」「シカク」と言って図形を書かせて、その図形の枠の上に同様の形をした図版を置く（事例２、＃13～15）。枠をともに作っていくことが関係の繋がりを形成していく。

④ 対象への関心が危害を与えない存在としてのＴｈへと向かう

K君はトランポリンという枠を通してＴｈとの関わりが増していく。Ｔｈが揺らしたトランポリンに乗り、振動を楽しむようになりＴｈの存在を求めるようになっていく。振動を作り出すＴｈの存在を意識するようになっていく（事例１、＃６～９）。また、さらにK君は、同様に枠を描いたＴｈの枠に興味を示しＴｈに寄って来て枠を描くように求めた

（事例１、＃15）。枠の中にともに入っていくことが大切になっていく。

⑤　他者に決して介入されない身体をもつ対象として存在し、身体への関心が生じる

トランポリンという場において、Ｋ君が身体の動きや働きかけに気持ちを向けているのを感じる。Ｋ君の身体に触れてゆっくりと身体を揺らしてみる。身体の緊張が抜けていくのを感じる（事例１、＃19）。

⑥　身体と身体が向き合い響きあう関係を通して生身の身体が生じる

Ｋ君はＴｈの前にクレパスを置き、背筋を伸ばしてＴｈの絵を覗き込んできた。Ｔｈは長方形の枠を描き、その枠の中を塗った。すると自分が絵を描いているかのように「うー」「うー」と興奮した声を出して身体を揺らした（事例１、＃15）。

４）枠の意味（自他の境界を作る身体としての枠）―他者が鏡となり個としての他者の身体の発見と同一化―

他者との関係の枠を通して、他者の身体を発見し同一化していくなかで、自分の中に身体像が形作られる。

⑦　介入的な働きかけにより身体による〈能動－受動〉の情動的交流が生じる

ＴｈがＫ君の手にそっと触れるとしっかりとＴｈの身体を見るようになる。差し出した手を見て、笑いながら自らの手を引く等の行動が見られる。次第に自らＴｈに触れてくる行動が見られるようになる。Ｔｈが手を出すのを待っていて、手を出すと「キャッ、キャッ」とはしゃぐ（事例１、＃20）。浜田（1992）の言う〈能動－受動〉のやりとりである。手を引き合うことによって、引いている他者の身体を感じながら〈能動〉、引かれている自分の身体を感じる〈受動〉。次は逆に自ら引くことによって他者の身体を感じ〈受動〉ながら、自分の身体を感じる〈能動〉などのやりとりが見られるようになる。

⑧　自分の姿を鏡を通して見たり、あるいは他者が鏡となり、身体の外枠を作る

Ｋ君はじっとＴｈの身体の動きを見ている。Ｔｈがトランポリンを跳びながら〈パン、パン〉と手を叩くとＫ君もそれを見て手を叩く。次にＴｈが手を拡げて跳ぶとＫ君もすぐにその動作を真似る（事例１、＃24）。自分の身体とＴｈの身体を重ね合わせる行動が見られる。それを通してドラえもんとの同一化が見られるようになる。ドラえもんを持ち歩いたり、常に傍に置いたり、ドラえもんに似た人物画を描くなどの行動が見られる。また、事例２においては、＃72～73では、鏡を見ながらＡ君が口を開けて形を作るとＴｈも鏡に見えるように口を開けてみる。またＡ君が髪をかきあげるとＴｈもかきあげてみる。鏡に映ったＴｈと背後にいるＴｈを交互に何度もみるなど、自分の身体とＴｈとの身体とを確認する行動が見られるようになる。また、演劇の狐の役をするが、それ以降物を口に加えるなど、狐になりきった自分の姿を鏡に映して見たり（＃46）、興味をもっている車になったり（＃62）、番組のキャラクターのしゃくとり虫になったり（＃74～75）、ウサギになってピョンピョンと跳ねたりする（＃82）。鏡への興味が一段と増し、自分の顔や表情を鏡に映して表情を作るようになる。＃99では、Ａ君とＴｈが鏡に映っているのを見て〈これは〉と聞くと「浦崎先生」〈これは〉「キャベツくん」もう一度同じように聞いてみると〈これは〉「浦崎先生」〈これは〉「僕」と応える。自分が運動会に参加している絵を描き、鏡に映った自分の姿を見ながら、自分の名前を言えるようになる。Ｔｈとの関係の中で鏡を通して自分とＴｈの姿を見ることが、Ａ君の身体像の外枠を作っていくようである。

２．身体の内枠作り

１）枠の意味（内と外の境界となる身体としての枠、心の器となる内的な枠）―自我の誕生、内的世界の生成―

身体の外枠作りと平行して、枠が感情を入れる内的な器としての枠になっていく。自閉症児が排出している堪え難い苦痛な感情を受け止める内的空間の誕生とともに枠が身体の

輪郭となっていく。身体像が形成される。

⑨ 〈排便－授乳〉体験としての情動を受け入れて返す、内的な器ができる

K君はプレイルームに別のＣ１が入ってくると興奮して「うー」「うー」と声を出し、怒りを露わにする。Ｔｈの傍で感情を投げ入れるように色を塗ると怒りが治まっていく（事例１、＃34)。プレイルームから出た後にＴｈの傍で母親の胸を触わったり、顔を埋めたりするようになる(事例１、＃61、＃108)。それが増えると同時にプレイの終了後にトイレに行くようになる。描いている枠の角が取れて丸みを帯びる（事例１、＃108)。＃43－＃45では、壊れた信号機を手にもっている。信号機が壊れているととても不安なようで「はい」と言ってＴｈに手渡す。信号を直すのを嬉しそうに見ている。Ｔｈの膝の上に座ることが増える。途中でトイレに行きたくなり、一人で走っていくなどの〈排便－授乳〉の体験をしている様子が増える。＃64－＃68では、母親との関わりにも情動的交流が深まり、見知らぬ人の家に行って遊んでいても、時々戻ってきて母親の目を覗き込み甘えてくるなどの行動が出てくる。

⑩ 枠が身体の形となり、自己像が誕生する

K君はＴｈに人物の輪郭を描くように要求してくるが、最初は上手くゆかず途中で諦める（事例１、＃70～71)。再び、事例１の＃79では、それまでバラバラであった楕円形が接して１つとなる。そしてついに＃96で１枚目、２枚目と激しい枠を描いた後の、３枚目に身体像が誕生する。その様はバラバラであった部分対象が統合されて身体像が生じてきたようである。事例２においても身体部分に○や×などの枠から身体像が生じる過程が見られた。これらの変容過程は、外的な枠としての身体を通した関わりと、内的な枠としての〈排便－授乳〉の過程が密接に絡み合って身体像が生じていくことを示していると考えられる。

内枠作りについては、今後相互の情動的な交流の詳細な分析が必要とされる。また、外枠作りとの相互の重なり合いと身体との関連性についても考察を深めていかなくてはならないであろう。

引用文献

浜田寿美男　1992 「私」というもののなりたち　ミネルヴァ書房

伊藤良子　1984　自閉症児の〈見ること〉の意味－身体イメージ獲得による象徴形成に向けて－　心理臨床学研究、1－2、44－56

中井久夫　1984　中井久夫著作集・精神医学の経験－第１巻分裂病－　岩崎学術出版

千原雅代　2002　自閉的な心性をもつ思春期女児との心理療法－身体像の観点から－　箱庭療法学研究、15－1、17－29

渡辺雄三　1988　心理療法と症例理解　誠信書房

Williams, D.　1993　河野万里子(訳)　自閉症だったわたしへ　新潮社　(Williams, D.　1992　Nobody nowhere. New York, Times Books.)

山上雅子　1999　自閉症児の初期発達－発達臨床的理解と援助－　ミネルヴァ書房

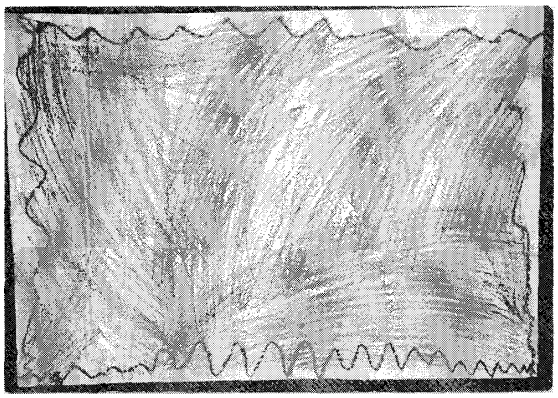

図1

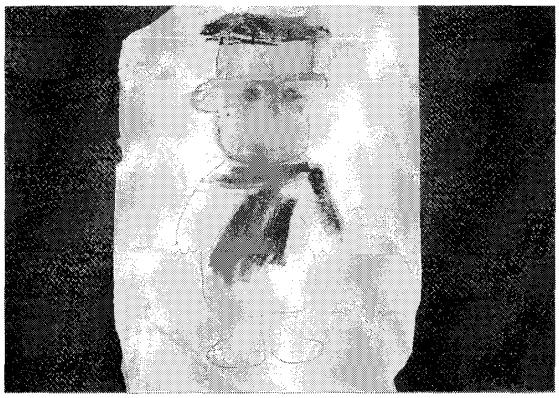

図2

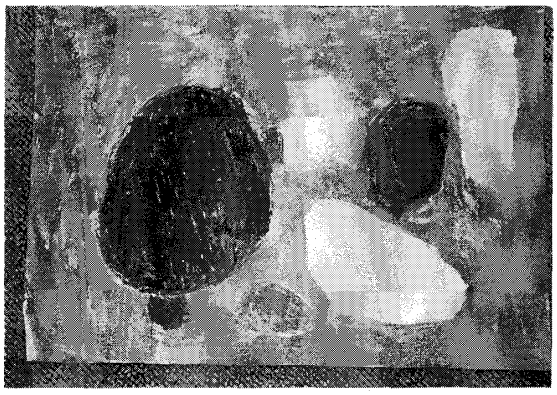

図3

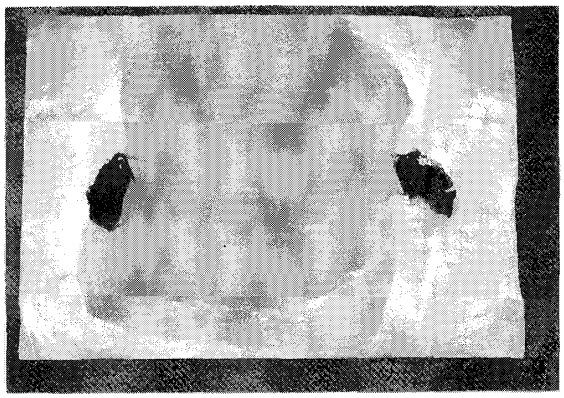

図4

図5

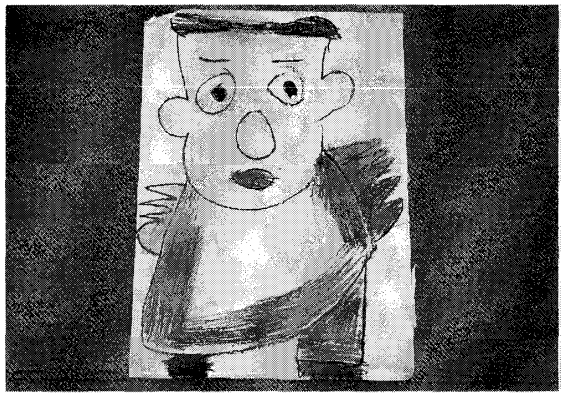

図6

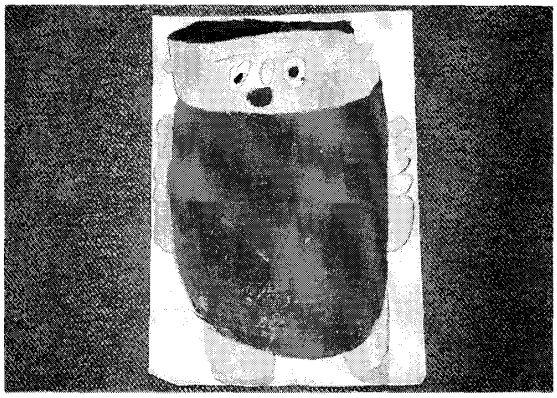

図7

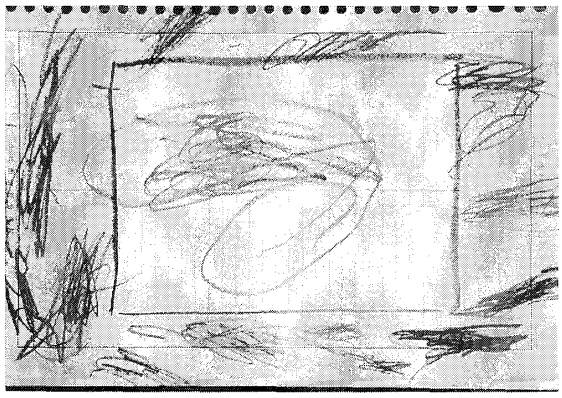

図8

図 9

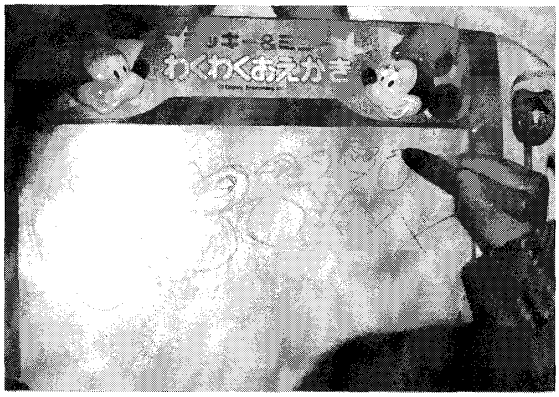

図10

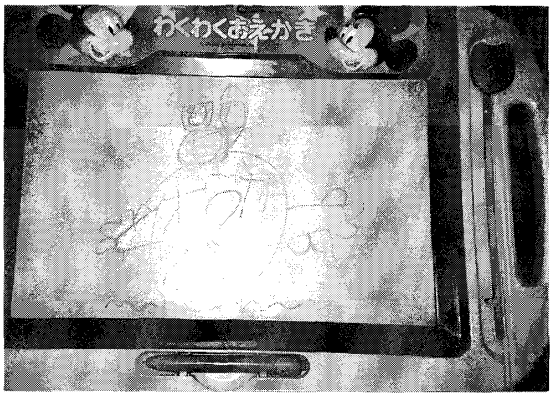

図11

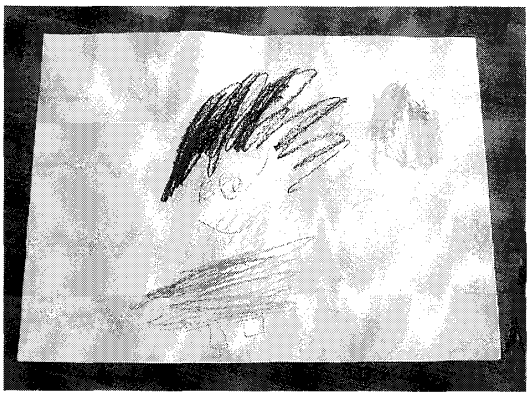

図12